

自由の学風を継承する京都大学

清華大学学生代表

見学日時：2024年11月28日（木）13:30-19:30

見学場所：京都大学

見学概要

訪日2日目、私たちは日本で最も歴史がありまた著名な大学の1つである京都大学を訪れた。

まず初めに、京都大学の学生の引率の下でキャンパスを見学した。大学正門の奥のシンボルともいえるクスノキはすでに87年の歴史があり、成長は遅くとも枝や葉が茂っている様は学術の道においては着実な努力があつて初めて成果を挙げることができるとの点を象徴している。また歴史展示室の展示品は同大学の悠久の歴史を物語っており、創立から120年余りにわたり無数のトップ人材を育成するなど、「科学者のゆりかご」として称賛されている。今はちょうど深秋の時期であることから、キャンパスの景色も特別な趣があつた。



次いで、私たちは韓立友准教授による特別講座を拝聴した。韓准教授からは京都大学の自由の学風及び研究に没頭するとの伝統について詳しい紹介があり、私たちは京都大学の精神や文化について知ることができた。また韓准教授は自身のγ-グルタミルトランスペプチダーゼに関する研究について紹介をし、多くの団員の興味を引いていた。

その後、私たちは弁論交流を行った。弁論テーマは「教育における女性へのサポート提供には逆差別をもたらすリスクがあるのか」というものだった。私たちは京都大学の学生らとたくさん意見交換をし、互いの社会における現状や文化について知見を深めることができた。最終的に、肯定側と否定側の双方は、性別による不平等は私たちの社会において依然として存在しているため、教育においては女性へのサポートを行うべきであり、それにより女性の地位が男性を上回るとの事態は全体としてみれば生じないが、個別の事例においては逆差別をもたらす可能性があるとの共通認識を得た。また弁論の終了前に私たちは別の英語グループの学生らと討論の結果を交換した。



夜の懇親会ではより気軽な小グループでの踏み込んだ交流をすることができた。私たちは午後の一と時を共に過ごしていただけだったが、お別れの際はとても名残惜しかった。



ご存じですか？

1. 京都大学のエンブレムは1本の巨大なクスノキがモチーフになっている。このクスノキは1935年に京都大学吉田キャンパスに植えられたと推測され、現在まですでに90年近い歴史がある。このクスノキには深い意味合いがあり、クスノキは着実に成長する樹木で、たとえ成長速度が遅くとも常に成長を続けるため、学問や人生におけるプロセスもこのクスノキの成長に例えられる。そして人の成長には時間が必要だが、常に成長し続けることで、いつかは空高くそびえる大木のように成長することができることを表している。
2. 2024年時点で、京都大学はすでに1949年の物理学賞受賞者の湯川秀樹（日本人初のノーベル賞受賞者）を始め、朝永振一郎（1965年物理学賞）、江崎玲於奈（1973年物理学賞）、福井謙一（1981年化学賞）、利根川進（1987年生理学・医学賞）、野依良治（2001年化学賞）、山中伸弥（2012年生理学・医学賞）、赤崎勇（2014年物理学賞）、本庶佑（2018年生理学・医学賞）、吉野彰（2019年化学賞）を含めた10名のノーベル賞受賞者を輩出している。また驚くべきは、日本における自然科学分野のノーベル賞受賞者の最初の3名はいずれも京都大学出身であり、彼らの住まいも京都大学近くにあり、その中でも湯川秀樹と朝永振一郎は同級生であった。ノーベル賞やフィールズ賞等の重要な賞の受賞状況から見て、京都大学は学術研究分野において間違いなく強大な実力を備えており、この点については京都大学の自由で独立した学風、学術研究における様々な方向性への寛容さそして科学者による自身の分野における長年の研究と切り離せないものだと言える。

感想

午後の訪問により、私たちは京都大学の自由で独立した学風へのたゆまぬ追求を感じたと同時に、大学は学生と教員が主体となり、学生に対し様々な分野で自由に成長する空間を提供すると共に、研究者が興味のある分野で探求する上での確かなサポートを提供すべきであるとの、日本がここ 30 年間に於いてノーベル賞受賞者を多く輩出している理由についても垣間見る事ができた。現時点で一見するとクレイジーな現実的ではない発想も将来的に世界を変える力を持つかもしれない、また一見目立たない些細な発見も将来的に新世界の門を開くかもしれない。理系学生である私は今回の京都大学への訪問から、自分は一体どのような研究をしたいのか、注目を集める分野を研究するのか、それとも最も困難の伴う課題について探求するのかについてしっかりと考えるべきだと感じた。私たちの現時点の努力や変化はあまり大きな波を引き起こすことはないかもしれないが、京都大学の正門にあったクスノキのように一年一年着実に成長することで、私たちはいずれそれらが実る日を迎えることができると確信している。